ハンセンボランティア　ニュース
第39号
ゆい
結・YUi
2024年10月15日　発行
ゆいの会事務局
岡山市北区弓之町1-17 五藤ビル4階
山本勝敏法律事務所内
電　話(086)234-1711
ＦＡＸ(086)234-8696
編集 則武　透
ゆいの会
ハンセンボランティア

第21回 ハンセンボランティア養成講座を開催しました！

【巻頭言】

一般社団法人ハンセンボランティアゆいの会は、本年3月には発足20年を迎え、21年目に入りました。前号のゆいニュースの巻頭言でも書きましたが、国立療養所では入所者の高齢化と減少に伴い、遠くない将来には、「療養所」の役割は終焉を迎えることが見込まれていますが、他方でハンセン病問題に関しては残された課題は少なくありません。

その一つが、ハンセン病に対する偏見差別の解消に向けた人権啓発のあり方です。

２０２３年12月に厚生労働省が設置した「ハンセン病問題に係る全国的な意識調査検討会」（座長：坂元茂樹人権教育啓発推進センター理事長）が、24年３月に「ハンセン病問題に係る全国的な意識調査報告書」を取りまとめました。

この報告書に関連して、熊本日日新聞２０２４年７月24日朝刊に、歴史学者の藤野豊氏が、「隔離政策は救済ではない。ハンセン病『歴史修正主義』」を憂う」と題する、次のような文章を寄稿されていますが、私も同じように思っています。

「報告書において、『ハンセン病問題に関する歴史的事実・考え方に対する意見を学習・啓発経験別に比較すると、学習や啓発を受けているほど、誤った言説を指示する傾向の回答割合が高い傾向が見られる』と報告され、これまでのハンセン病問題に関する人権啓発のあり方の根本的な見直しが求められている。…ハンセン病隔離政策には今の時点から見れば誤りもあったかもしれないが、過去においてはやむを得ない面もあり、患者を救済しようと療養所の医師たちは献身的に患者に奉仕したのであって、隔離を人権侵害と決めつけるのは一面的であるというような理解が国民の間に定着したら、熊本地裁判決が誤りとなり、原告たちの思いは踏みにじられてしまう。」

本年６月13日・14日に邑久光明園で第97回日本ハンセン病学会総会・学術大会が開催され、その一日目に「特別講演」を行う貴重な機会を得ました。私は、「人権の歴史を一歩前進させるために～ハンセン病問題から学ぶ～」と題した特別講演のなかで、ハンセン病問題へ関わる中で学んだことやハンセン病問題の検証には、人権の観点からの歴史を見直すことなく、誤った歴史を正当化するものであってはならないこと等、藤野氏の指摘にも繋がるお話しをしました。

そして最後に、医療専門職の皆さんにたいし、「我が国が89年にもわたり誤った隔離政策を継続したことについては、国、地方自治体、医学界、法曹会、マスメディア、教育界などの関係者の責任とともに、私たち国民も、かつて無らい県運動などを通じて、自分らの住む社会からハンセン病患者を排除し、社会的な迫害を繰りかえしてきた歴史があり、こうした過去の歴史から教訓を学ぶことなしに、一人ひとりが人間の尊厳や人権を尊重し、だれもが差別されずに生きることのできる共生社会を築くことはできません。そのためには、我が国のハンセン病政策の過ちがもたらした事実を、一人ひとりが心に刻み、非人間的な事実が、我が国で長年にわたり行われてきたことを記憶し、次世代に語り継ぎつづける責務があり、その責務を果たすことにより、日本における人権の歴史が一歩前進されることになると思います」とお話ししました。

今後も、ゆいの会は、できる限り、市民として、具体的な活動を通して、この責務を果たして、人権の歴史を一歩進めるために寄与したいと願っています。

（代表理事　近藤　剛）

2024年度総会報告総会

2024年4月13日（土）午前10時から11時15分までの間、邑久光明園ふれあいホールで2024年度総会と研修会を開催しました。議決権を持つ正社員55名中、本人出席16名、委任状出席21名が参加し、協力会員も参加しました。

総会では、企画部局、傾聴ボランティア、個別ボランティア、広報部からそれぞれ前年度活動が報告され質疑が行われました。前年度活動報告に続き前年度決算報告と監査報告がありいずれも承認されました。続いて本年度活動方針として、十坪住宅「路太利」ガイドボランティアを本格化させ「路太利」ガイドを中心とした活動に重点を置く方針が報告されました。最後に本年度予算審議が行われ承認され、総会を終了しました。なお、最近、療養所に収容されたことで救われた患者もいると主張して隔離政策は負の面ばかりではないという議論があるようですが、感染力の微弱な病気に対して過度に伝染力を強調して一律に全患者隔離収容を強制的に進めた国の政策は、患者の人生を破壊した極めて異常な人権侵害であったといわざるを得ず、仮に療養所に収容されたことにより救われたと感じる患者がいたとしても許されるものではありません。

総会後、昭和7年から昭和16年まで長島愛生園に内科医として勤務した小川正子が刊行した書籍を映画化した「小島の春」をユーチューブで鑑賞しました。小川の検診の旅を通して、小島で暮らす治療も受けられず打ち捨てられた患者と家族の哀れさが同情を生む映画となっていますが、映画に描かれていない、患者を療養所に終生強制隔離して生を終わらせるというわが国ハンセン病隔離政策の実相を頭に置いて、映画「小島の春」を鑑賞する必要があります。

（事務局長　山本勝敏）

◎十坪住宅「徳島路太利」現地ガイドボランティアを募集中！

毎月1回、現地ガイドボランティアを行うことになりました（定期的な清掃も兼ねています）。日程等詳細はメーリングリストやホームページでご案内します。ぜひ、多くの方にご参加いただければ幸いです。

◎十坪住宅動画完成のお知らせ

ゆいの会では十坪住宅「徳島路太利」の説明ビデオを作成しました。

（Youtube　4分42秒）

ハンセン病隔離政策の歴史と十坪住宅が建てられた経緯について解説しています。ぜひ、ご覧ください。

QRコード　十坪住宅動画

（字幕あり）

（字幕なし）

ハンセンボランティアニュース

結・ゆい・Yui　第39号

―目　次―

1. 巻頭言 …… 1
2. 2024年度総会報告 …… 2
十坪住宅動画（字幕あり・なし）
3. ボランティア活動報告 …… 3
十坪住宅現地ガイドボランティアに参加
十坪住宅入居者証言ビデオ（動画）を制作
4. 十坪住宅「徳島路太利」修理報告 …… 4
第21回ハンセンボランティア養成講座
5. 実践報告（黒住さん・則武さん） …… 5
6. 受講生の感想（桐岡さん） …… 6
アンケート、ホームページ開設

ボランティア活動報告

◆十坪住宅現地ガイド ボランティアに参加しました

夏の一日。私はその日をドキドキしながら迎えました。ゆいの会での初めてのボランティアです。ベテランの疋田さんのもとで、十坪住宅の掃除とガイドのお手伝いをしました。

私はテレビ局に勤務し、去年5月、ハンセン病患者が死後に解剖されたことを示す「解剖録」をテーマにしたドキュメンタリー番組を制作しました。これをきっかけに、生涯をかけてこの問題に向き合いたいと決意した私は、取材経験などを生かして何かお役に立てないかとゆいの会のボランティア研修を受けました。もともとはアナウンサーで、しゃべることは割りと得意！生放送の数々もこなしてきたのですが、ボランティアデビューの日は、朝からソワソワしていました。一日、疋田さんの傍で、オタオタしていたのを覚えています。

その日、私は思いがけない出会いをすることになります。十坪住宅には、予定のあった20人ほどの見学とは別に、大阪から急遽やってきたという50代と60代の姉妹が、熱心に疋田さんの説明に耳を傾けていました。お二人は、亡くなった後に知らされたという叔母さんのお墓参りにやってきたというのです。お二人は、社会から差別を受けることもなかったと話し、穏やかな表情で納骨堂に眠る叔母さんと対面したそうです。

番組取材の中で、長島愛生園には、年代によっては亡くなった入所者のほぼ100％の解剖録と、入所時の写真が残っていることを私は知っていました。ついつい「もしかしたら会ったことがないという叔母さんのお写真が残っているかもしれませんね…」声をかけずにはいられなくなりました。お二人は、私の話に足を止め、涙を流しながら聞いてくれたのです。

取材活動の中でも、遺族や当事者の辛い思いを伺ったり、それぞれの人生の岐路に立ち会うこともありました。それと同じように、ゆいの会のボランティア活動でも、当事者の人生の節目に立ち会う機会があることを実感したのです。特別な思いで療養所を訪れる当事者の思いに触れる貴重な機会でした。そんな思いに、手弁当で寄り添い続けるゆいの会の皆さんの思い…。その温かさを感じながら、あの日、私は私にできる精いっぱいの活動を続けていきたいと誓ったのです。

（20期生　竹下美保）

◆個別ボランティア報告

ゆいの会では、両園からの要請に基づき、入所の方からの個別の要求にお応えするボランティ活動を行っています。今まで買い物や旅行の付き添い、話し相手、パソコン指導などの要請に応えてきました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、ここ数年は要請がなかったものの、昨年より邑久光明園のKさんより依頼があった活動を続けています。

Kさんからの要請は、今までKさんが描いた絵画や作品、集めた本や資料などの整理をしていきたいというものです。ゆいの会の会員にボランティア活動に参加できる人が募ったところ、14名の方から応募がありました。現在、第2・4日曜日・木曜日の月に4回、14時30分～16時、2名体制で訪問を続けています。最初はお互いに緊張がありましたが、今では私たちの訪問を楽しみにしてくださっています。

中学1年生で入所をしたKさんは、新良田高校で絵画と出会い、大人になってから編み物やデザインなど服飾関係も独学で学び、たくさんの作品を作っています。それらのリストを眺めたり、作品に関する話を聞いて過ごすこともあれば、園でのできごとや、昔の話をお聞きすることもあります。文化や芸術に造詣が深く、また社会問題への関心も高く、教えて頂くことばかりです。最近は、体調不良のためお休みが時々ありますが、Kさんが穏やかな時間が過ごせるようなお手伝いを今後も継続していければと思っています。

ボランティア活動に参加したいという方は、随時、ボランティアの募集をゆいの会会員のメーリングリストでお知らせしておりますので、ぜひご参加下さい。

（監事　森田千賀子）

十坪住宅入居者証言ビデオ（動画）を制作しています

ゆいの会では、十坪住宅「徳島路太利」を修復し、見学者の受け入れやホームページで紹介などをしています。その内容をさらに充実するために、入居していた方の証言ビデオ（動画）を制作しています。現在も愛生園で生活されている、Tさんから当時の生活の様子をお聞きし、収録を進めています。

Tさんは、昭和19年、20才の時に愛生園に入所しました。昭和20年に結婚したあと十坪住宅「第三千代田寮」に入居し、昭和33年頃まで、10年以上第三千代田寮で生活しました。

「十坪住宅では6畳の部屋に二組の夫婦が生活していました。辛い事もありましたが、みんなで声をかけあって生活し、楽しい事もありました。当時は、定員を超える入居者がいて、食糧事情が厳しく、朝早く海に岩ガキを取りにいったこともあります…。」

Tさんの記憶は鮮明で、かつて住んでいた「第三千代田寮」の跡地で、当時の生活の様子を語って下さいました。

入所者の高齢化で、当時の生活を語る人が段々少なくなる中、貴重な体験を後世に残す事の大切さを感じます。十坪住宅入居者証言ビデオ（動画）は

収録を終え現在編集中で近日中に完成予定です。

（理事　志賀雅子）

◆十坪住宅「徳島路太利」修理報告

２０２０年10月に十坪住宅「路太利」の修復を完了し、閲覧希望者には喫茶「さざなみ」に設置された愛生園福祉課窓口で鍵をお渡しして自由見学してもらっています。また、昨年９月より毎月第２日曜日にゆいの会会員による案内ボランティアを実施しています。ところで、「路太利」を修復してすでに４年近くになり、床や壁、天井などに傷みが出てきたため、本年７月30日、修復業者の梶原建設さんにお願いして、出窓の側壁や天井、床、押し入れ、浴槽などのはがれた部分の修理を行い、場所柄、白蟻が出る危険があるため防蟻工事を実施致しました。また、今後は、年２回、梶原建設さんにお願いして、目視による建物各部の点検、測量機械・器具を使用した定点観測と建物の変位計測、必要に応じて改修の提案をして頂くことにしました。ハンセン病隔離政策の手段として愛生園で独自に建設された十坪住宅は、他園にはない愛生園にのみ残された貴重な建物ですので、ゆいの会として「路太利」を今後とも大切に保存したいと考えています。皆様、お時間があれば、是非、十坪住宅「路太利」に立ち寄り、十坪住宅が隔離政策に果たした役割を体感して下さい。

（事務局長　山本勝敏）

第21回 ハンセンボランティア養成講座を開催
～7人が受講～

開催日時	テーマ・講師	場　　所
７月６日（土） 13:00 ～ ① 13:00 ～ 14:20 ② 14:30 ～ 15:30 ③ 15:40 ～ 16:40	【講座Ⅰ】 ○開会挨拶　ゆいの会会長　近藤　剛 ①「ハンセン病問題の歴史と人権について」 講師／ゆいの会会長　近藤　剛 ②「ハンセン病とは」 講師／長島愛生園園長　山本　典良　氏 ③ゆいの会オリエンテーション、実践報告	きらめきプラザ７階 702 号室 岡山市北区南方２－13－１
７月 13 日（土） ④ 10:30 ～ 11:40 ⑤ 12:30 ～ 14:30 ⑥ 14:40 ～ 15:30 ～ 15:30	【講座Ⅱ】 ④「入所者との交流」 担当　入所者自治会から ⑤長島愛生園内フィールドワーク 案内役　ゆいの会会員ほか ⑥講座修了式、修了者との交流会 ○閉会	長島愛生園 （日出会館ふれあいホール）

◎実践報告では、20期生の黒住さん、7期生の則武さんに個別ボランティアの報告をいただきました。

黒住さん

則武さん

私のハンセン病や長島との関りは、長島愛生園が今年も開催していた日生港からの見学クルーズに２０１６年7月に参加してからです。学芸員の方に案内され説明を聴き、あまりにも知らなかったという現実にがく然としました。

私は、岡山で生まれ育ち、今も住んでいます。

１９９６年らい予防法廃止、２００１年国家賠償訴訟原告勝訴の時、どちらも40代でした。ニュースに触れたけど、ほとんど気に留めなかったということです。

穏やかな海の景色にも惹かれ　後日また長島を訪れました。

その頃、私より10才くらい年上の方から「何で、そんな怖い所に行くのか？」と言われ、その言葉がずっと私の頭から離れずハンセン病や強制隔離のことをもっと学んでみたいと思い、コロナ禍を経て２０２３年のゆいの会のボランティア養成講座に参加しました。

というわけで、私は、ゆいの会に参加してまだ1年数か月です。

今は、入所者（80代女性Kさん）の傾聴ボランティアをグループで担当しています。

Kさんは、これまでに絵画、ニットのデザイン・製作、著書など数々の作品を残されています。この傾聴ボランティアの目的は、それらの作品の製作時期・制作に込めた気持ち等々をKさんから聴き取り、記録・整理していくというものです。

私は、絵画とかに素養がないので少し不安でしたが、何度も通わせてもらううちに大事なのは、それぞれの作品を制作した頃のお気持ちをお聴きすることではないかと思うようになりました。

療養所に入所間もない子どもの頃に描いた絵を何度かとても愛おしそうに説明して下さいました。

「絵具が薄いでしょ、きっと不安だったのよね」「本当は、描きたくなかったんだ」

80代のKさんが、子どもの頃の自分に寄り添って話しかけているようでした。結婚して、仕事として始めたニットの作品が評価されたと誇らしく話される様子。大人になってからの絵画もその時々の不安定だった気持ちなどとても素直に語って下さいます。

決して手や足の不自由なことを嘆いたり言い訳にすることはなく、聴かせてもらっている私の方が自分の奥にある力を引き出してもらっているような感じさえしてきます。

ゆいの会は、他にも「十坪住宅 徳島路太利」の案内や維持管理の活動も行っています。

高齢の入所者のお気持ちに寄り添うようなボランティア活動と同時に、ハンセン病や長島の歴史を語り継ぎ、人権教育の場として後世に残す活動もますます重要になってくると思います。

大正11年生まれの私の父は、戦中戦後長島の対岸の虫明で巡査をしていたそうです。仕事柄　多くのことを経験しただろうと推測できますが、長島のことは何も語らず、差別的なことも語らず12年前に亡くなりました。私が長島を訪れたのは、その４年後でした。親子で何も継承できなかったことを悔やんでいます。

厚生労働省のHPからは、中学生向けパンフレット「ハンセン病の向こう側」がダウンロードでき、「２００３年から全国の中学校に送付しております」と記されています。

私たちは、２０２０年から始まった新型コロナウイルスによるパンデミックを経験しました。感染が他人事でない状況の中で　感染者への配慮と冷静な対応ができたか、多くのことを考えました。

機会があれば自分たちも長島に行ってみたい、ハンセン病について学びたいと思っている人たちはいます。

国の誤った強制隔離政策のもとで偏見と差別に耐え、懸命に生き、戦った人たちやその家族のいることを、いたことを伝えていかなくてはいけないのです。

微力でも諦めずに、伝えていく活動にも参加していきたいと思います。

（20期生　黒住都）

子育てや親の介護の負担があり、ゆいの会のボランティアには、これまで十分に参加出来ていませんでした。そんな中で、昨年から、数回ですが、邑久光明園のKさんのボランティアに参加しています。

Kさんは駿河療養所から邑久光明園に転居されてきた方ですが、絵を描かれたり、編み物を創作されたり、本を書かれたり、芸術に対する造詣がとても深い方です。既にお亡くなりになっていますが、Kさんのパートナーも写真家の方でした。

ゆいの会では、昨年から週に1回のペースで、Kさんのところへ訪問して、Kさんの描いた絵を整理したり、写真を撮ったり、作品の解説を文書に残す作業を行っています。10数名のチームを組んで、交代して作業を行っています。

最初は、何のためにKさんにお会いするのか、目的がはっきりしない時期もありましたが、その内、Kさんがある作品のことを説明された際に、それを文書に残して、その作品と照合できるようにする作業をやればよいのだと分かるようになりました。

Kさんのボランティアに参加してよ

かったことを２つ上げます。

一つは、なぜ、Kさんがその作品を描いたのか、作品の解説を伺うことで、Kさんの生きざまに接することができ、いろいろと考えさせられることです。あるときに、Kさんが解説して下さったのは２枚組の抽象的な絵でした。ひとつには明るい道、もう一つには暗い道が描かれています。Kさんは多くは語られませんでしたが、２つの道には、ハンセン病療養所の希望と絶望が象徴されているように感じました。

もう一つは、同じボランティアを行う仲間との交流です。Kさんは芸術家気質の方ですので、時には気難しいこともあり、最初は、私もおっかなびっくりでした。それでも、ベテランの志賀さんとペアで対応しているので、安心してボランティアに参加しています。行き帰りの車中で志賀さんとおしゃべりするのも楽しみです。

最後に、Kさんのボランティアに参加することは、決して、Kさんに何かをしてさしあげるという意味ではなく、むしろ、私がKさんから何か大切なものをもらっているように感じます。

是非、私たちと一緒にKさんボランティアに参加して、その醍醐味を味わっていただきたいと存じます。

（7期生　則武万季）

◎受講生の桐岡勇さんに養成講座の感想をお寄せいただきました。

私は今回、ゆいの会が主催するハンセンボランティア養成講座に参加させていただき、ハンセン病についての講座、長島愛生園への訪問等の講座を受けることになりました。

日本におけるハンセン病隔離政策の歴史については以前個人で調べたことがあったのですが、実際に近藤先生やゆいの会の会員の方の説明を受けて、入所者の方がこれまでにどういった人権侵害を受けてきたか、人権を取り戻すためにどんな努力をしてきたかをより理解することができました。

また、長島愛生園の入所者の方のお話を聞き、入所者の方が当時どのような状況で大変な生活を送ってきたかを実感できました。長島愛生園では実際に入所者の方が住んでいた住宅や当時使用されていた建物の跡を見学することになりましたが、特に住宅はかなり小さく、あの住宅に何人もの大人が居住していたとは信じられないと強く思いました。

養成講座の際何度も説明を受けて印象に残っているのが、入所者の方が年を取られている関係で中々外出したりお話をしたりすることが難しくなっているということでした。これからも入所者の方に寄り添っていくと共に、入所者の方が後世に伝えていきたいことがあればそのお手伝いをしていくことが大事だと感じました。

（21期生　桐岡勇）

◎主なアンケート内容

【講座Ⅰ―①】

- 日本だけでなく世界の様子もわかった。ハワイのことは知らなかったので勉強になった。
- ハンセン病の歴史について順を追って細かく学ぶことができた。今後の療養所のあり方について国が早く動き、良い方向に進むといいと思う。自分がそのために何ができるか考える。ハンセン病の問題は決して忘れてはならないし、語り継いでいかなければならないと思った。

【講座Ⅰ―②】

- 園長先生の話が聞けてとてもよかったです。色々な視点からハンセン病のことが学べました。
- 内容が多く難しかったが、近年のコロナウイルスと比較しながら学んだ。

【講座Ⅰ―③】

- 実際にボランティアとして、療養所の方と交流したり、活動している方のお話が聞けてほっとした。自分にもできることがあるとよいと思う。

【講座Ⅱ―④】

- 自治会長の中尾さんが体験されたこと、思ったこと、今思っていることを聞くことができ、療養所での生活やそこで生活されてきた人たちのことをさらに深く知ることができた。差別や偏見の中にいた人たちがどういう思いで見つめていたのかと思っていたけれども、そのことを悲しんだり苦しんだりしつつも一生懸命生きてきたんだなと思った。

【講座Ⅱ―⑤】

- 昨年クルーズツアーで回った所も再度歩いた。新たに十坪住宅の中を見せてもらい、入所者の方の生活を見て身近に感じることができた。だんだんと当時の様子が分からなくなる中、残すことの大切さを感じる。また、ゆっくりと野山を歩くこともしてみたい。

【講座Ⅱ―⑥】

- ゆいの会の会員の方のお話が聞けてよかった。自分もできる範囲で伝えていけたらと思う。

◎ゆいの会ホームページを開設しました

ゆいの会ではホームページを開設しました。

https://hansen-yuinokai.com//

最新情報・ブログと、少しずつ情報発信していきたいと思います。ぜひ、多くの方にご紹介ください。

（QR コード　ゆいの会 HP）